

『ハックルベリト・フィンの冒険』

六六

## 『ハックルベリト・フィンの冒険』

——個人と社会——

本 城 精 二

『ハック・フィン』の作者マーク・トウェインは人間の存在について自己の深い問題として生涯苦悩していたようである。社会を吟味し、社会の中の個々の人間を吟味し、その上で現実に置かれた社会の中の自己の問題として如何に生きるべきかという問題意識はトウェインの最大の関心事であったようである。人間が——特にトウェイン個人が——如何に生きるべきかという思弁的・道徳的な問題と、逆に自分がどのように生きたいかという、本能的・欲求的な生き方の問題のジレンマをトウェインが長い生涯において解決したか否かは別の問題として、少なくともこの作品においてその問題意識が強く呈示されている事は否めない。

現実社会における個人の生き方の問題は、社会を無視しては考えられない事であり、常に個人対社会の問題として扱えなければならない。トウェインの追求する生き方の問題は現実社会におけるそれであり、決して社会を無視しているわけではない。個々の人間が常に社会の一員である限り、生き方の追求は個人と社会の対立であり苦闘であると思われるが、それは人間の普遍的な問題であると思われる。この普遍的な問題をトウェインはこの作品の中で、ハックという少年をイノセントな存在にする事によって人間の原点の生き方を追求している、と思われる。人間の原点、

すなわち先入主を払拭し、自らの視点で物を見、自らの観点から考え判断し、自らの生き方を試行錯誤しつつ追求するところにこの作品の意義があると思われる。この点についてこの小論で考察してみよう。

トウエインの性格上の最も著しい特質はその二重性であるが、両極端の自我意識を持っていたようである。自我を形成する要素として、個人的本能的意識と社会的意識とがあり、トウエインの場合前者は意図に自由奔放に、欲求を欲しいままに快楽的に生きたいという快楽の原則であり、後者は社会からあるいは他人から高く評価されたいために禁欲的に勤勉な努力をするという評価願望の原則である。このふたつの原則が極端にかけ離れているのがトウエインの大きな特徴であり、多くの要因を原動力としてこのふたつの原則のバランスを失ったのが晩年のペンシズムという形になって現われたようである。しかしこの作品の中ではこのふたつの原則のバランスが崩れているとは思えない。ハックの社会の束縛から逃れ、自由に快楽的に生きたいと希求する態度はトウエインの快楽の原則に従うものであるが、現実の難問に直面し、現実を無視せず勤勉的に解決を導こうとするハックの姿勢はトウエインの評価願望の原則に従っているものと思われる。このようにハックはトウエインの快楽の原則に従った特質を保持しながら、評価願望の原則に従って巧みにあやつられ、バッドの指摘する「社会的態度」<sup>(6)</sup>として具現されているのである。こういった意味でハックは、大方の研究者が指摘するように、トウエインの代弁者、もしくはスミスのように「仮面」<sup>(7)</sup>であると言えよう。

トウエインは幼少年時代をハンニバルの町で過ごしたが、その町の一少年をハックのモデルにし、「彼の自由な生活は全く誰にも制約をうけないものであり、彼の幸福な生活をわれわれ残りの者は羨望の眼で彼を眺めていた」<sup>(8)</sup>と自伝に記している少年のイメージにトウエイン自身の生命を吹き込み、物語化したところにトウエイン自身の生き方に対する問題意識に通じる重要な鍵があるように思われる。すなわち、ハックは本能的に社会の束縛から逃避し、自

らの自由な生き方を志向する少年であるが、冒険途中に種々な現実問題に当面し、それぞれの解決を導こうとする現実主義者である。そのハックに、スペインジマンの言うようにトウエイン自身の同一性を与え<sup>(6)</sup>、ハックに現実社会における無垢な生き方を模索させる事によって、トウエイン自身の人間の原点に立った生き方を追求していると思われるのである。

もし社会というものを別けるとすれば原始社会と文明社会に大別されるが、前者は一般通念的な観念も慣習も全くない、いわば社会規範のない社会であり、後者は逆に一般通念的概念や一応の規律の存在する社会であると言えるが、トウエイン自身が追求する生き方とは現実社会である文明社会におけるそれである。人種問題、特に黒人奴隷、中国人、ユダヤ人等の社会における存在について強い関心を持っていたトウエインにとって、現実の社会とは人種的偏見、皮膚の色別的偏見、身分階級的偏見、信教的偏見等々、種々の偏見に満ち、邪悪な人心が横行しているとみられる社会である。そのような社会の中で右のような偏見を全く持っていない事を明言する<sup>(6)</sup>トウエインが自己の生き方を求めるといふ事は、「イノセントな自然的人間と腐敗した文明との苦闘<sup>(6)</sup>」を意味している。この事は「自然児」的ハックが社会の通念、社会の悪を相手に苦悩し、葛藤しつつ自己の生き方を求めるといふ形で具現されている。ここで「自然児」といふのは、現実社会から逃避し、自然のみを友とし自然の中で孤独な生活をするという意味でなく、現実社会から逃避したいという願望にも抱わらず、やはり現実社会の中に存在して、しかも社会の毒気に汚されず、あるいはその毒気を払拭しイノセントな存在である事を意味している。こういう意味で「自然児」的性格がトウエインの追求する人間の原点に立った生き方に符合すると言えるのである。

トウエインの現実社会における個人の問題は、白人黒人の域にとどまるものではないが、その意識の発端となったのは彼の生活体験、主として黒人奴隷の悲劇からきたものであるように思われる。黒人奴隷に対して非常に愛情を持っていたトウエインは自伝の中に奴隷制度に対する問題意識を縦横に記しているが、「小学生のころは……：奴隷制度

というものに何か問題点があると考えてもみなかった」<sup>(6)</sup>とも述べている。トウエインの幼少年時代は、すでに記した通り、西部でもあり同時に南部でもあるミズーリ州のハンニバルで過ごし、そこは当時奴隷制を是認する社会であり、その制度に対して、「正当であるだけでなく、正義に適っており、神聖であり、神が特別に嘉したもうた制度である」<sup>(7)</sup>と教会で教えられ、一般にそう信じ込まれていた社会である。そういう環境で育ったトウエインが、自らの体験の中から、奴隷制度に対して、また白人同士の戦鬪的行為に対して問題意識に眼覚め、人間の普遍的な問題として人権を越えた個々の人間の在るべき姿や、そういった社会の中で自己の生き方として考えるようになったのは、その後の少年時代であったようである。それは丁度この作品のハックの年頃に一致するように推察できない事はない。ハック自身がそういう意識に眼覚め、社会通念を捨て、自らの観点で再認識するところにトウエイン自身の意図があると思われるからである。いずれにせよ、黒人奴隷の逃亡を題材のひとつとして提示している限り、その点に注意を払わねばならないであろう。

ハックが自分自身の生き方を追求する事は作者トウエイン自身の生き方の追求であると考えねばならないが、すでに述べた通り、人間の原点に立った生き方の追求であるから、ハックの「自然児」的性格を十分検討しなければならぬ。通俗社会から与えられた先入主を捨て、自らの視点に立って物を見、判断して自己の生き方を求めようとする態度が人生の開眼であると言うなら、その時点からスミスの指摘するこの作品の三つの要素のうちのひとつ——ハックの人格形成（\*）の展開（8）があると言える。そしてこの人格形成の展開に「自然児」的性格の意義が浮き刻りにされるわけであり、それは「自然児」的個人と社会通念との対立という形で現われてくる。

「自然児」的ハックが社会通念と対立する件りには、逃亡奴隷としてのジムの存在が大きい。すなわちその対立はハック個人のジムに対する評価と、一般社会の黒人奴隷に対する評価との差異であり、それは黒人を愛するトウエイ

ンと人種的偏見を持った現実社会との意識の差異にほかならない。トウェインが少年時代を過ごした南北戦争以前は奴隷制が当然の社会制度として是認された時代であり、体験からきた問題意識——「悲劇が起るたびに、それをすべで自分の問題として心に受け止め、その意味を心に刻みこんでいった」<sup>60</sup>と自伝に記している問題意識がこの作品に具現されているようである。しかも奴隷解放宣言が本当に黒人を自由にした、とトウェインは思っていないのである。<sup>61</sup>この作品の中で、単に奴隷制度の是非を述べようとしているのでなく、黒人としてジムを描く事によって人間の本質的な在り方をトウェインが示唆していると思われるのである。

「ジムの言う事は正しい。ジムの言う事はいつも本当だ。彼は黒人にしては並々ならぬ頭をしている」<sup>62</sup>（八四頁）というハックの率直な告白は黒人の再認識を提唱するトウェインの言葉でもある。先入主を捨て、自らの判断をする「自然児」的ハックのジムに対するこの評価は、この作中の時代（一八四〇年代と思われる）の社会の黒人に対する評価を白紙環元するだけでなく、奴隷解放宣言後も黒人が人間的に評価されていないと信じるトウェインの社会に対する意見であるとみてよいであろう。その意見のひとつとして黒人の人間的価値を再考せよと社会に訴ったえるものであると思われる。すなわちそれはハックの如く無垢な立場からの評価を促すものである。

このように先入主を捨て、自らの評価をするところから人格形成は始まると思われる。言い換えれば、社会通念を捨て個人の判断と意思を尊重するトウェインの人生の模索であると思われる。何故ならその模索の過程は、常に個人と社会の対立の中に、個人の生き方を追求するものであるからである。そしてその対立のゆえに苦悩と葛藤が在り、それを乗り越える事が個人の人生観を高める精神成長であると思われる。こういった意味で葛藤とは新しい認識の起点であり、価値基準の確立へ向う精神態度であると言えるが、この作品の中でハックの葛藤は三種類み受けられる。ひとつは一人の人間に対する個人的価値評価と社会通念との対立からくる葛藤であり、いまひとつは社会の制度に対する個人の感情と社会通念の対立からくるものであり、さらにもうひとつは両者の性質を合一した葛藤である。これ

らすべて社会に対する意識からくるものであるが、これはハックの社会的自然児的性格によるものである。これらの葛藤のうちまず人間的価値評価からくる葛藤に眼を向けてみよう。

ハックがジムを怒らせ、ジムのあんたがいなくなっちゃったで、ワンの胸は張り裂けそうだった。で、ワンの事も筏ももうどうでもええと思っただ」(九四頁)という言葉を聞いて、ハックは激しく葛藤をするが、それはジムに詫びて許しを乞いたい気持と、ジムが黒人であるため詫びるべきでないという社会通念との対立である。ここではジムが逃亡奴隷としてでなく単なる黒人としての意識がハックの心内に働いているのであるが、詫びたいという気持はジムの存在を一人の人間として卒直にその価値を認め、自己の卑劣に気づいている謙虚な態度である。この件りの中に、ジムのモデルである実在の黒人に対して、「忠実で愛情深い親友、味方、指導者としての中年の奴隷」<sup>(94)</sup>を尊敬していたトウェイン自身の感情は十分含蓄されている。すなわち黒人であっても白人であっても人間として同等の存在であるという思想である。そしてハックはジムに率直に謝罪するが、これはドゥボウトの指摘する通りトウェインの社会に対する謙虚な批難である<sup>(95)</sup>、と言えなくはないがもっと重要な意味を持っているように思われる。すなわち、トウェインの求める理想郷の第一の設定としてこのハックと黒人ジムの筏の世界が挙げられているのである。その世界はハックにとつて、またトウェイン自身にとつて自由で快楽な愉快な世界である。この事は、奴隷解放宣言後も黒人の位置が旧態同然であるとみなしているトウェインの、直接行動にはしていない社会運動であると言える。つまりジムをハックの「父性的存在」<sup>(96)</sup>として描き、筏の世界を理想郷として描く事によって、現実社会に対して道徳的倫理観の確立を哀切的に提唱しているものと思われる。同時に「自然児」的な価値判断と生き方の重要性を提訴しているものであると思われる。

右のように人種の偏見を越え個人の存在価値を提訴するために、トウェインはハックを操り、さらに快楽の世界を求めさせていると思われるが、ハックのもうひとつの葛藤の中でトウェインの意図するところは興味をひくものであ

る。それはハックの奴隷制に対する新しい認識を得る葛藤である。この作品の中で、ハックとジムの筏がカイロの町に近づく事は、ジムにとって自由への入口に近づく事であり、ハックにとってそれは奴隷の逃亡幫助という罪の意識に苛まれ、決断を迫られる葛藤となるのである。先に逃べた葛藤の中で、ハックはジムの価値を認識し、友情の意義を悟ったが、奴隷制に対しては何ら問題とはしていない。それはこの時の葛藤でハックの問題意識が出てくるのであるが、結果的にみてハックは、筏に近づいてくる二人の白人に無意識に嘘を言つてジムを救つたのである。すなわちジムの逃亡を黙許し、同時にそれを幫助した事になる。ここにトウエインの見解が出ている。すなわち奴隷制を否定するものである事は言うまでもなく、もっと広い意味で社会の制度そのものを再考すべきであるという提言である。慣習的に続けられている社会のあらゆる制度に対して、ハックの如きイノセントな立場から再考し、道徳的な制度や考え方を促すものであると思われる。またこれは二次的な意味で、奴隷制を是認してきた南部社会に対する痛烈な風刺でもある。

このように考えてみると、「自然児」的な価値、いわゆるイノセンスの価値が非常に重大なものとしてトウエインが暗示している事になる。イノセントな考え方、生き方が社会の悪に对照して確かに価値あるものとして描かれているようであるが、それはトウエインの思弁的な見解であり、積極的な行動にまで至るものではない。何故なら、ハックを筏上の安全圏に置いての生き方の模索であり、広い社会の中でそのイノセンスがどこまで存続し得るかがこの作品のテーマに通じるが、その結論はこの小論の最後に逃べる事にしよう。だが、ここでもう少し注意をしなければならぬ点がある。ハックが奴隷制に対する社会通念から離れて、イノセントな境地に至る過程には苦しい葛藤があったわけである。それはトウエインの勤勉的な態度に通じるものであり、思弁的な見地でもある。しかしハックがジムを救つた後、「これからはいつも、その時に一番都合のいいようにしよう」（一〇〇頁）と告白している心理は、トウエインの本能的な日和見的な生き方である。しかも筏の世界が理想郷として持続する限りこの生き方を容認している

のである。この事はトウエインの求める生き方が怠惰な快楽的なものであると言えそうである。

ハックの最後の葛藤は、二人の悪党の邪計のためジムが南部の奴隷を有する農園に捕われた時に起るが、ここでも重要な要件としてハックはもはや安全圏ではなく、悪の横行する状況下に居るといふ事である。今までに逃べた二つの葛藤の結末は身の安全を保障された安全圏における思弁的なものであったが、この葛藤は先の二つの性格を持った実地の苦闘である。こういった状況を考えれば、この葛藤はスミスの指摘する「情緒的クライマックス」<sup>(9)</sup>の頂点にあると言える。ここで問題なのはトウエイン自身のこの葛藤の件りに対する見解である。すなわち感情的なあるいは思弁的な解決策を有していても、それが行動となる必要性に対するトウエインの見解であるが、その見解はハックの言葉と行動の中に示されている。ハックは葛藤の末、自分の身を安全圏に逃避させず、自分のしようとする事が「氷劫の火の中に入れられる」<sup>(10)</sup>に値するものである事を承知の上で、「よし、それじゃ僕は地獄へ行こう」<sup>(11)</sup>（二三二頁）と決断を下し、ジムを救出しようとするのである。ハックは他人の事を無視して自分の身の安全だけを考えて逃避しようと思えば出来るのであるが、そうせずに自我を捨て自己犠牲的な生き方をしようとするのである。この事は「トウエインが忠義のために闘っている」<sup>(12)</sup>とブレアが指摘しているように、人生の模索の一過程として禁欲的な自己犠牲的な生き方を提示しているのである。そしてこれはトウエインの本能的な快楽の原則に反するものであり、自己抑圧的なものである。この社会の悪に對抗して無垢な忠義心を行動にまで至らしめている生き方は、最終的に（ジムの救出後）ハックの現実社会からの逃避という形で終っている事から判断して、トウエインの究極的に求める生き方ではないようである。しかし、ハックの葛藤を通して、無垢な観念の萌芽と「自然児」的イノセンスの存在が悪に満ちた社会においては非常にその意義が高く宣揚されている事は疑いない。そしてスペインジマンの「個人的人間はイノセントであり、社会的人間は腐敗している」<sup>(13)</sup>という言葉が、トウエインの社会に向けた皮肉的な警句として生きてくるのである。



小説という虚構の世界の中で、現実社会対個人の問題を考えるためには、現実社会と同様の多様性が含まれなければならない。この作品の中には、トウェインがその創作前段階に意図した通りバラエティに富んだ諸種の生活ライフが描かれているが、その構築された世界を仮想の現実社会とみて、トウェイン自身が人生を模索しているという事はすでに述べた通りである。ハックの葛藤の件りを通してその一面をみてきたが、次にそれ以外のハックの苦悩を通してさらに社会と個人の問題を洗い出してみよう。

この作品の中で本能的に自由享樂の生活を求めるハックの姿はトウェイン自身の姿であり、快樂の原則に従ったものである。またそれはトウェインの本能的なあるいは希望的なものと考えてよい。その理想を投影したものが筏の世界であり、外界との關係を断絶した一種の理想郷である、というのがトウェインの最初の仮定である。確かにそれはハックの言葉からも察知し得る通り、他人からの束縛のない自由奔放な快樂の世界であるという一面もあるが、しかしその前提は絶対的なものではない。その理想郷の破壊者としてまず蒸氣船が現われる。この事は理想郷が現実社会の抗し難い大きな力によって侵害され、個人の自由快樂の生き方が阻止される事を意味しており、まずここに最初の仮定を否定するひとつの要件が出現する。その蒸氣船——個人の生活の侵害者——が一寸エンジンを止めただけで、何事もなく行ってしまったというハックの感想はトウェイン自身の社会観の一端でもある。他人の生活を侵害しておきながら、ほとんど気にも止めない現実社会の一般的態度としてトウェイン自身が受け取っていると考えられる。

個人の独自の生き方を最大限に尊重するのが筏の世界であるはずが、現実社会からの影響を完全に断絶する事が出来ず、侵害者が現われるが蒸氣船がそのひとつである。また逃亡奴隷を探している二人の白人も、理想郷に影響を与える一例である。さらにもっと大きな積極的な侵略者として二人の詐欺師を提示しているが、これは極めて侵略的な悪が現実社会に存在する事を意味し、独自の生き方を築こうとする理想郷が決して安住の地でなく、社会悪の侵害に對して對抗すべき手段を保持しない非力な世界である事を意味している。無垢な個人的人間が独自の生き方を求めて

現実社会を逃避して小さな理想郷を築こうとしても、常に外界すなわち現実社会の悪の侵害、干渉、影響を免れない事をトウエインが示唆しているものと思われる。

安住の地としての小世界が侵害される事は、現実社会において個人の自由が完全には守られないというトウエインの意図であるが、それでも生きねばならないと考える意識がハックを操って生き方を模索しているわけである。ハックの、「もし彼らが（二人の詐欺師）われわれに王様だとか、公爵だとか呼ばせたいんなら、僕は反対などしやしないさ、それが家族の平和を守るのなら」（一三七頁）という言葉はトウエイン自身の思弁的な生活信条であり、何よりも平和と心の平穏を望む態度とみてよい。またそれは自己犠牲を意味する思弁的な社会的態度である。また、「筏の上で何よりも必要なことは、みんなが満足し他の者に対しては正しい親切な気持を持つことだ」（一三七頁）というハックの言葉もやはりトウエイン自身の禁欲的勤勉的な人生観であると思われる。つまり社会における個人の義務として協調性と道徳的倫理観が必要である事を示唆し、それが平和と満足感の獲得につながるという思想である。この思弁的な生き方がトウエインの究極的に追求するものかどうかを考えてみなければならぬが、この思弁的な生き方をもう少し作中より材料を取って考えてみよう。

二人の詐欺師が三人姉妹の遺産を横取りしようとして企て、遺族になりました彼らが大げさに泣き悲しむ演技を「自然児」的な観点から、「こんなことは今まで絶対に起こしたこともない。本当にそれは人間として体中恥ずかしくなるぐらいだった」（一七六頁）という批評から読みとれる通り、二人の詐欺師が悪の最高の象徴としてトウエインが想定していると思われる。そしてその悪党が人間の反社会的傾向の典型と思われるし、トウエインの眼に映る現実社会の一傾向でもあろう。こういう状況の下でのトウエインの人生の模索のひとつとして、ハックを三人姉妹の味方にし、遺産を悪の手から守り、悪党を正義の手に委ねるといふ試行の中にみられる。しかしこの生き方は非常に骨の折れるものであり、非常な苦痛と苦悩を伴うものであり、自由快楽を求めるハックをこの生き方から解放させようと

するトウエインの意識の中には、このような禁欲的な自己犠牲的な生き方はトウエイン自身の求めるものではないようである。

トウエインの眼に映る現実社会が腐敗したものであるという事は何度も述べたが、この作品の中でグレンジャーフオード家とシェファードソン家の対立抗争の件りの中にもみられる。ここでトウエインの示唆する社会は、人間同士が不必要な流血惨事を繰り返し、個人の生命と人格を無視する世界という事になる。同時にこの世界の人間が真の道徳的信念を持っておらず、教会の説教が人間の行動と完全に遊離している事に対して、「ほとんどの人が教会へ行くのは、行かなくてはならない時だけだ。だが豚はちがう」（二二二頁）という言葉によって最高に風刺しているのである。このような闘争の社会を嫌悪するトウエインの姿勢は、決闘や戦争を嫌って逃げ腰になった態度と一致するものである。

「アーカンソーの事件」（第二十一章）として描いている中で、人間の正義感についてトウエインは、悪を制裁すべき確固たる正義感はないという見解を示している。群集となった場合の勇氣は大きいようでも、それは「借り物の勇氣」（一六〇頁）でしかなく正義として必要な真の勇氣はない事を示している。また二人の詐欺師によってたやすく欺される市民を描く中に、トウエインの現実社会の人間が洞察力に欠けた無知な存在であるという意識が呈示されているようである。さらにこれを拡大解釈すれば、一般的な人間がたやすく悪の手中に陥り、たとえ正義感があったとしても、それを行動にまで継続させる力の欠如している事を示していると言える。このような社会においては、ハックは「謙虚な人間の謙虚な精神の蒸留物<sup>99</sup>」であり、「自然児」としての意義を失なわなないためには、そのような社会から逃避するしかない事を示している。そして最終的にハックがフェルプス家から逃避して、自由を求めてインディアン部落へ旅に出ようという件りは、トウエインの理想として求めるイノセントな生き方が腐敗した現実社会や、束縛の多い現実社会では確立出来ない事をトウエインが具現したものであるとみる事が出来る。換言すればスペンジ

マンの指摘するように、「個人対社会の問題を解決し得ない」<sup>60)</sup> トウェインの姿であり、仮想の原始社会へハックを逃避させる事によって「自然児」的善の価値を最大限に宣揚するものであると思われる。

以上の経緯をまとめて結論としよう。

トウェインの思弁的な生き方として禁欲的な自己犠牲的なものがあるが、これには苦悩と苦痛を伴うものである。そしてこのような思弁的な生き方を最後の段階に至るまで逃避的に扱う事は、トウェインの究極的に求める生き方が本能的な自由快楽の原則に従うものでなければならぬ事を示している。同時にそれは本能的な生き方が現実社会には確立し得ない事をも示している。しかしながらイノセンスの価値を宣揚し、「自然児」的な生き方、すなわち人間の原点に立った生き方を尊重する精神態度は、イノセントな人間が現実社会の偏見と悪心に満ちた中で良心の苦悩なしに生かれる事を欣求したトウェインの願望であると言える。そして理想とするイノセントな世界は「社会理想の想像的投影」<sup>61)</sup> であることみなしてよいであらう。

- (1) Louis J. Badd, *Mark Twain: Social Philosopher* (Port Washington: Kennikat Press, 1973), 105頁。
- (2) Henty Nash Smith, *Mark Twain: The Development of a Writer* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1971), 118頁。
- (3) 渡辺利雄訳『マーク・トウェイン』(東京、研究社、一九七五——アメリカ古典文庫第六巻)、四八頁。これは Charles Neider 編 *The Autobiography of Mark Twain* を訳出したもの。
- (4) William C. Spengemann, *Mark Twain and the Backwoods Angel* (The Kent State Univ. Press, 1996), 六七頁。
- (5) Philip S. Foner, *Mark Twain: Social Critic* (New York: International Publishers, 1972), 133, 137頁。
- (6) Spengemann, *op. cit.*, 六八頁。

- (7) 渡辺利雄訳『マーク・トウェイン』、四八頁。
- (8) *Ibid.*, 八九頁。
- (9) Smith, *op. cit.*, 一一四頁。
- (10) 渡辺利雄訳『マーク・トウェイン』、一〇九頁。
- (11) Foner, *op. cit.*, 二八二頁。
- (12) Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn* (London: The Macmillan Co., 1962), 八四頁。以下この本からの引用は本文中の( )内にページを記す。
- (13) 渡辺利雄訳『マーク・トウェイン』、四七頁。
- (14) Bernard Devoto, *Mark Twain at Work* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1942), 九六頁。
- (15) 吉田弘重著『マーク・トウェイン研究』(南雲堂) 二九七―三三三頁の中でジムの父性的存在について詳しく。
- (16) Smith, *op. cit.*, 一一〇頁。
- (17) Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn* (Berkeley: Univ. of California Press, 1973), 三四三頁。
- (18) Spengemann, *op. cit.*, 六四頁。
- (19) Devoto, *op. cit.*, 九九頁。
- (20) Spengemann, *op. cit.*, 六九頁。
- (21) *Ibid.*, 八一頁。